

カワラバッタ

[バッタ目バッタ科]

(学名: *Eusphingonotus japonicus*)



▲成虫の体色は河原の砂や礫石と重なり、保護色となる



▲成虫よりも多彩な色彩をもつ幼虫

バッタやイナゴの仲間の多くは、田んぼの畦(あぜ)や畑、開けた草地などを棲みかになります。しかし中には少し変わった場所で見られるバッタもあります。カワラバッタはその名の通り、河川の河原の砂や礫石(れきいし)に広く覆われた場所(砂礫河原)にのみ生息します。成虫の体長は3cm前後と比較的大型です。体は灰色や淡褐色で、河原の礫石や砂地にとまっていると保護色となり背景に上手く溶け込みます。また、体の内側に折りたたまれている後翅(こうし)が、青色であることも特徴の一つです。気配に敏感で、人が近づくとすぐさま飛び立ち、視界の先に鮮やかな青色をひらめかせ着地すると、再び河原にまぎれます。

カワラバッタは日本固有種で、北海道、本州、四国、九州に分布します。只見町では、伊南川や只見川といった比較的大きな河川や、生息に適した環境があれば、それらの支流でもしばしば見られます。幼虫は6月頃から現れ、成虫は盛夏から秋口に多くなります。幼虫の体色は、成虫よりもバリエーションに富み、青色や灰色、そして大理石のような色をした個体まであります。成虫のように飛んで逃げるのができない分、様々な色彩をもつことで周囲と一体化し身を隠すという、生き抜くための巧妙な戦略です。

近年、カワラバッタは全国的に減少しています。それは生息環境となりうる河川中流域の砂礫河原が各地で消失しているためです。このような環境は、河川の氾濫時に上流からの砂や礫石が堆積することで形成されます。治水工事により河川の氾濫が抑えられると、砂礫河原は林へと変わり、カワラバッタも姿を消します。こうした不安定な環境を長年渡り歩いてきたバッタなのです。

只見町ブナセンターからのお知らせ

只見町ブナセンター附属施設「ただみ・ブナと川のミュージアム」では、下記の通り企画展「只見の養蚕」を開催しております。お誘いあわせのうえ、ぜひお越しください。

企画展「只見の養蚕」

会期:2020年7月4日(土)~2020年10月5日(月)

場所:ただみ・ブナと川のミュージアム 2階ギャラリー